令和３年度　専攻科学生選抜学力試験問題用紙　小論文

次の三つの文章を読んで，以下の問いに答えなさい。

（A）

多くのリベラルと左派のコメンテーターは，コロナウィルスの蔓延が，これまで西洋民主主義社会では考えられなかった人びとの統制および規制措置の正当化と合法化に，どれほど役立つかを指摘してきた。イタリアの全面的厳重封鎖は全体主義の未だ渇かぬ夢の実現ではないか。デジタル化された社会統制をすでに広汎に実施している中国が（少なくとも現在みてとれる限りでは），破局的蔓延に対処すべく最高度に備えているのもむべなるかな。これは，少なくともいくつかの面で，中国がわれわれの未来であるという意味か。われわれは世界規模の例外状態へ近づいているのか。ジョルジョ・アガンベンによる分析が，新たな現実性（アクチュアリティ）を得たということか。

アガンベン自身が以下の結論を引きだしたことにも驚きはない。彼は多くのコメンテーターとは根本的に異なるやり方で，コロナウィルスの蔓延に反応した。彼はインフルエンザの別バージョンである「コロナウィルスの想定された蔓延に対して採られた，狂乱的で非合理な，絶対に不当な緊急措置」を嘆き，「なぜメディアと当局は混乱の風潮を生みだすことに血道をあげ，かくして，諸地域全体への厳しい移動制限と日常生活および仕事のための活動の停止といった措置によって，真の例外状態を引き起こそうと躍起になるのか」と問うた。

この①「不釣り合いな反応」の主な理由をアガンベンは，「例外状態を通常の統治規範として使用する傾向の高まり」に見てとる。とられた措置によって政府は，行政上の政令を通して，われわれの自由の深刻な制限を可能にする。「米国学術研究会議によれば，〔新型コロナウィルスは，〕毎年わたしたちを脅かす通常のインフルエンザとそれほど異なるものではなく，そうしたウィルスからの脅威に対する制限として，これらの制限があまりに不釣り合いであることは明らかである。〔…〕かつてテロリズムが例外的措置の正当化として使い尽くされたように，ウィルス蔓延の発明は，あらゆる限度を超えたこうした措置の拡大にとって，格好の口実を提供できると言えるかもしれない」。二つめの理由は「恐怖の状態」であり，これは「近年，個人の意識の中に拡がっており，集団的混乱状態に対する現実的要求に変換される。この状態に，ウィルス蔓延が再び理想的な口実を与えている」。

（B）

単純化の危険を顧みず図式化すれば，これまで感染拡大の危機への対応策として，主に二つの選択肢が諸政府によって提示されてきたといえよう。②一つは，イギリス政府がいったん明確に打ち出しはしたものの，内外の厳しい批判にさらされて方針転換に追い込まれた「集団免疫」戦略であり，もう一つは，中国・韓国・イタリア等がそれぞれ異なる仕方で採用してきた「社会防衛」戦略である。社会思想的な観点からすると，前者は「適者生存」という社会ダーウィニズム的発想（そこでは，人口の一定数の死は「自然淘汰」の一形態とみなされる）に導かれた「〈マルサス的〉応答」の新版として，後者は「社会は防衛しなければならない」と題されたミシェル・フーコーの講義を一つの淵源とする「生政治」概念（そこでは，人口を構成する住民の健康と生産性の保証が重視される）の今日的展開として捉えることもできる。

この間，中国・韓国・イタリア等が――社会統制や権威主義の度合いには差があるとはいえ――

実施してきた社会防衛戦略が一種の「グローバル・スタンダード」として受け入れられている現在，日本政府が暗黙の集団免疫戦略（「自粛要請」と「検査抑制」）になおも固執しつづける大きな動機と理由の一つは，東京五輪の「完全なかたちで」の「実現」とそれに関連する集合的利益の確保に求められるだろう。してみれば，「外圧」に押されてようやく「一年程度」の開催延期が決まった東京2020が中止されないかぎり，「非常事態」のただなかにおいても「通常（ノーマル）」を装おうとする力や，「通常（ノーマル）への回帰」を求める衝動に駆り立てられ，明示的な社会防衛戦略よりも暗示的な集団免疫戦略の方が優先されつづける可能性を否定することはできない（「補償・給付なき自粛要請」はその一つの徴候であろう）。もちろん，感染者数の急増が明白になれば，「緊急事態宣言」や「ロックダウン」等の「決断」を迫られ，社会防衛戦略を前面に押し出すほかなくなるだろうが，その場合ですら，宙吊り状態の「解体するスペクタクル」が一定の反作用的な影響を及ぼすものと予想される（本稿提出後，「ロックダウン」なしの「緊急事態宣言」が発令された）。

（C）

Ⓐ現在の危機は，センシング技術やモデリング技術を「監視」や「社会統制」につながるものとして頭から「悪」と決めつけ，自動的に批判してしまいがちだった旧来の分析視角を，今日の新たなメディア環境のなかで問い直すための機会を提供するかもしれない。「惑星規模のコンピュテーション」を解析した *The Stack* の著者として知られるデザイン理論家，ベンジャミン・ブラットンの最近のつぶやき（ツイート）を引いておこう。「単刀直入にいって，あらゆるかたちのセンシングとモデリングを「監視」として，また積極的なガバナンスを「社会統制」として反射的に解釈してしまうのは間違っている。現状に介入するためには，それらとは異なる，もっとニュアンスに富んだ語彙が必要なのだ」。

じっさい，ウイルス検査やトレーシングを「監視」として批判・排斥するリバタリアン的な匿名性原理には，個人の自由を重んじる選択と一緒に，感染／死亡リスクの高いヴァルネラブルな人びとを危険にさらしてもよいという倫理的・政治的な選択が含まれている。グローバルなパンデミック危機のなか，センシング・トラッキング・モデリング技術を，監視・パノプチコン・生政治による捕獲というふうに——通俗的なフーコー理解にもとづく連想と重ね合わせて——捉える視点は，短絡的であるとの誹（そし）りを免れないだろう。

むろん，「監視は悪」という批判的な見解に「監視は善」という無批判的な見解を対置することが重要なのではない。監視という語ですべてを批判したつもりになるのではなく，その作動様式がどのように変容しているかを解析するための「もっとニュアンスに富んだ語彙」が必要なのである。

私たちはその一つの手がかりを，「パノプチコン（Panopticon）」モデルから③「パンスペクトロン（Panspectron）」モデルへの転換に求めることができるだろう。前者の「全展望監視システム」（M・フーコー）が中央からの直接的な監視に依拠しているのに対し，後者の「全データ（スペクトル）・モニタリングシステム」（M・デランダ）は，周囲のデータの絶えざる流れを交差させながら，社会の動きを予測制御することを目指している。

「新中国（ネオチャイナ）」／「サイバー中国」のデジタル・ガバナンスが，こうした転換に立脚していることはしばしば指摘されるところだが，私たちはこれを——ジル・ドゥルーズがインターネットの黎明期（『AKIRA』公開と同時期）に早くも予見していた——「監禁環境」モデル（「規律訓練社会」）から「高速道路」モデル（「コントロール（制御）社会」）への移行に置き換えることもできる。ドゥルーズは言う，「コントロールは，規律訓練ではないのです。高速道路のことを考えてみて下さい。

高速道路では，人々を監禁することなど問題ではなく，むしろ，高速道路を作りながら，様々なコントロール手段をどんどん増やしていくことが問題となるわけです。[…] 高速道路において，人々は，全く監禁されることなく幾らでも「自由に」周回することができる一方で，完璧にコントロールされてもいるのです。これこそ，私たちの未来の姿です」，と。

出典：『現代思想』第 48 巻第 7 号，緊急特集「感染／パンデミック」

※1　原文の注は省略してある。

※2　非常用漢字については原文のまま引用。

※3　難読漢字については原文にないふりがなを付したところがある。

問１　下線部①について，課題文で「不釣り合い」だとされているのはなにか。アガンベンの言葉が直接引用されている箇所を 43 文字で抜き出しなさい。

問２　下線部②について，課題文では，日本政府の戦略はどちらだと述べられているか。

問３　下線部③について，これを別の言葉で言い換えている箇所を本文中から９文字で抜き出しなさい。

問４　下線部Ⓐについて，課題文（A）（B）（C）は，新型コロナウィルスの感染拡大について異なる「分析視覚」から書かれている。下線部Ⓐの文脈に沿って、（A）（B）（C）それぞれの「分析視覚」について説明したうえで，あなたの意見を述べなさい。なお，700 字以上 1,200 字以内で記述すること。また，字数が 700 字に満たないものは採点の対象としないことがあるので注意すること。

<u>注意事項</u>

・ 草稿用紙は，メモなどに自由に使用して構わない。
・ ただし，解答用紙・草稿用紙ともに試験終了後に回収する。
・ 解答用紙・草稿用紙は，未使用のものもすべて記名し，試験終了後に提出すること。